

キューバの核武装をめぐる米ソの対立

——フルシチョフの大冒険失敗に終る——

田村幸策

目次

- 一 西半球唯一のソ連衛星国
- 二 キューバ亡命者の本土侵攻
- 三 フルシチョフのキューバ防衛理論
- 四 アメリカ警戒態勢に入る
- 五 息詰る一三日間の核危機
- 六 大統領ソ連にミサイルの撤去要求
- 七 国連事務総長の斡旋
- 八 両巨頭直接の書簡交換
- 九 紛争の解決と大統領声明

一 西半球唯一のソ連衛星国

一 カストロがいつから共産主義者であったかはミステリーのようなだが、「エンサイクロペディア・ブリタニカ」(一九七〇年版)によると、かれはゲリラ戦に成功して一九五九年一月一日政権を掌握するや、家弟ラウル・カストロ(軍隊の首長)、ヘルネスト・ゲバラ(国立銀行総裁でアルジェンティンの医科大学学生時代からの共産主義者)、オスワルド・トラドール(カストロが任命した大統領で永年の共産主義者)、アントニオ・ジメネス(全国農業改革研究

キューバの核武装をめぐる米ソの対立(田村)

所長で永年の共産主義者) などとともに、無制限、無拘束な権力を行使したとある。しかしカストロが公式にキューバを「社会主義国」と宣言したのは一九六一年五月一日のかれの演説であった。殊に有名な話はカストロが一九六一年一二月の演説で、「かれ自身学生時代からマルクス・レーニン主義の信奉者であったが、権力を掌握しうるまでこの事実を隠蔽していた」と声明したことである。

二 「偉大なる詐欺」の著者によると、カストロ政権がキューバをソ連に身売りしたのは、一九六〇年二月ミコヤンのハバナ訪問であって、ソ連はキューバとの間に貿易協定を結びキューバの砂糖五百万トン買付けを約束するとともに、キューバに一億ドルの借款と技術援助を提供することになった。キューバがそれまで関係なかったソ連および中国その他の共産圏諸国との外交関係が開かれ、東ドイツ、ポーランド、チエコスロヴァキア、中国とは貿易協定が結ばれた。ミコヤンは更にカストロに共産革命の秘密は「すべての生産資源、土地、地下埋蔵物、森林などを『無補償』で没収し、これを正当の所有者たる人民に引渡す」ことだと教えた。この年三月から一〇月にかけて十億ドル以上のアメリカの財産(公共事業、工場、精糖工場、銀行、精油所など)が無補償で没収された。

三 「フルシチョフ回想録」によると「キューバ革命の指導者たちが天国に昇った。すると神の公式代表としてセント・ピーターが現われてかれらを引見し、全員一列になれと命じ、『すべての共産主義者は三步前進』と号令した。先づゲバラが前進し、次にラウルが前進し、若干の他の者がつづいて前進した。しかるにカストロを含む残りの者全部は前進しなかった。そこでピーターはぎよろつとカストロをにらみ、『オイ、そこなアゴヒゲの大男、どうかしたのか。わしの言ったことが聞えなかったのか。すべての共産主義者は三步前進』と言ったはずだと叫んだ。この話の要点はセント・ピーターを始め他のあらゆる人は、カストロを共産主義者とみなしているにかかわらず、カストロ自

身のみがそうでないとしていることにある」と、フルシチョフは巧妙な作り話で、カストロの共産主義者たることを説明し、カストロは「弟のラウル・カストロが立派な共産主義者たることは知っていたが、弟は本当のことを兄にかくしていた」とも付言している。

注

大学生時代の親友によると「カストロは天才と不良青年とを一緒にしたような人間で、すばらしい閃きを見せたかと思うと、次の瞬間には無頼漢のような振舞いをした。かれは偉大な指導者になるか、さもなければ手のつけられないギャングになる男だ」とある（「偉大な詐欺」）。

二 キューバ亡命者の本土侵攻

一 一九六一年四月一七日早朝一万四、五千人から成るキューバ亡命者の軍団がビッグ湾の沼地に上陸したが、三日間を出でずしてカストロの優勢な軍隊に潰滅せしめられた。亡命者の軍団はガテマラにおいてアメリカの中央情報機関（CIA）によって組織され、訓練され、武装され、輸送され、指揮されたものである。従ってこの進攻とアメリカとの関係を否定することは不可能であった。事実、ケネディ大統領はこの失敗の全責任を回避しなかった。実はCIA指揮の下でキューバ解放軍の訓練と武装の計画は、アイゼンハワー前大統領時代に決定したものを、一九六一年一月二〇日ケネディ大統領が相続したものである。侵攻論者がいま決行しなければ永久にだめになると、大統領を説得した論拠の一は、軍団は完全な訓練され、斗いたくてむずむずしており、引留めることが困難だということ、その二は訓練地たるガテマラが各方面から圧迫をうけつつあるので、唯一の選択はかれらの帰りたがっている本国に送還し、そこで不平をばらまかせる以外にないこと、その三はカストロの軍隊がやがてソ連の兵器で増強され、ソ連その他の衛星国で訓練をうけつつあるキューバのパイロットがやがて帰国し、既に多数のミグ飛行機がキューバに到着してい

るので、一九六一年の春こそキューバ人によってキューバを解放しうる最後のチャンスだというにであった。大統領が侵攻作戦前のテレビ放送で、「もし今日アメリカが動かなければ、カストロは今日のかれよりも、遙かに大きな危険になりうる」とのべたのは、この第三論換の重要性を暗示したものと見える。その四はアメリカ自身が干渉の原則を破ってキューバに侵入しなくとも、亡命者の軍団がカストロ政権を倒しうる可能性あることであった。

大統領は侵攻作戦開始の一週間前、統合参謀本部を代表するレムニツァー將軍とバーク提督から「文書」による賛成をえ、ラスク國務、マクナマラ国防両長官からは「口頭」による同意を取付けたが、侵攻軍団がいかなる運命に陥るとも、アメリカ軍の直接間接な参加は許さないとの条件をつけた。理由は苟もアメリカ軍が公然と干渉した以上カストロ政権を倒すまで敗北は許されないので、その間ソ連は全面戦争を仕掛けないにせよ、ベルリンその他の場所に運動を起すこと必至だからである。CIAもペンタゴンも亡命者軍団も、大統領の条件に反対しなかった。

二 キューバの亡命者軍団はあらゆる人種、職業、階級、党派の人たちで構成され、よく訓練され、よく武装され、よく指揮され、上陸場所では戦術的奇襲に成功し、立派にかつ勇敢に戦い、二万人のカストロ軍に重大な損害を与えたが、テラー委員会の調査によると直接の敗因は「弾薬の不足」であった。一〇月分の弾薬の外通信機具、食糧、薬品を積んだ運送船は上陸の朝カストロの空軍によって、他の一隻の運送船とともに撃沈された。更に二隻の運送船が出発したが、姉妹船二隻が既に撃沈されたことを知って、一隻は遠方に逃走し、他の一隻は翌四月一八日夜陰にまぎれ弾薬を五隻の小舟艇に移し五〇マイル走って海岸に到着せしめんとしたが、夜明になり再びカストロ空軍の餌食となった。この夜ホワイトハウスの閣議室における真夜中すぎでの会議で、CIAと統合参謀本部は大統領にさきの公約を取消し、公然とアメリカの海空軍を導入してキューバ海岸の軍団を支持することを求めた。大統領は容易に同意

しなかったが、最後に「無記号の海軍ジェット機」をもって、翌朝、反カストロ軍団のB-26機を守ることに決した。悲劇的な誤りはB-26機が時間をまちがえて、海軍のジェット機が到着する一時間前に現われ、直ちにカストロのB-26機に撃墜され、ジェット機の使命は出発前に無効となり、弾薬に尽きた勇士たちはたちまちカストロ軍の捕虜にとられた。

大統領はなによりも捕虜になった勇士たちの処刑を防止しなければならぬと決意し、交渉の結果一、一三名を獄に收容さすことに成功した。亡命者側の損害はカストロ側の甚大な損害に比較して奇跡的に少いものであった。かれらは二〇カ月後のクリスマスの前夜、五千三百万ドルの薬品、幼児食、医療設備などと交換に釈放された。勇士たちを迎えた大統領は「いつの日か軍団の旗は自由になったキューバに翻える」と挨拶した。

三 フルシチョフのキューバ防衛理論

一 ピッグ湾事件の失敗を自己の勢力範囲拡大に利用したのがソ連であるが、事件後間もなく一九六一年六月三日ケネディ大統領はフルシチョフ議長とウィーンで初会合した。この会見は両巨頭が互に相手の器量をはかる機会であって、やがて発生するキューバ危機はフルシチョフがケネディを見損った結果たる公算が濃厚だ。ソレンセンによるとフルシチョフはこの会合で、「キューバ人がアメリカに反対するのは、資本主義集団がバティスタ（カストロが倒したキューバの大統領）を支持したからであって、ピッグ湾の上陸はアメリカ人が第二のバティスタをキューバに押付けるのだとの、キューバ人の恐れを増大させたのみである。カストロは共産主義者ではないが、アメリカの政策がかれを共産主義者にすることができた。私自身共産主義者だが生れつきのマルクス主義者ではなく、資本家が私をそうさせたの

であつて、カストロがどちらに向つて進むかは予言できない。もしアメリカが小さなキューバに脅威を感ずるとすれば、ソ連はトルコやイランとどうすればよいのか」とのべたので、ケネディは「キューバのみでは脅威とみなされえないが、キューバが危険になりうるわけは、カストロが西半球を破壊する意図を表明しているからだ。もしカストロが自由な選択によつて選ばれ、他国の選択に干渉しなければ、アメリカはカストロを是認したかも知れない」と答えた。

二 「フルシチョフ回想録」によると「ソ連がキューバに対する反革命の侵入を知つたのはラジオ放送であつたが、どんな旗印の下に行われたにせよ、それがアメリカの後援をもたねばならないことを知っていた。第一回はカストロが手際よく片付けたが、不可避的に行われる第二回の侵入が第一回のごとく拙い計画で拙く実施されると期待するのは愚の骨頂である。そこでカストロに第二回の侵人が行われるればキューバは潰滅されると警告した」とある。更にフルシチョフによると「ソ連の幹部はソ連がなにごとかしなければ、アメリカはキューバをそのままには残しておかないだろう。故にソ連はキューバが社会主義国として、またラテン・アメリカ諸国への模範として存在することを守るため、可能なあらゆることをなす責務があることに一致した。キューバの運命と同地域におけるソ連の威信保持とは、私にとってなによりも大切な仕事であつた。もしキューバを失えばマルクス・レーニン主義に対する恐るべき打撃になる。ソ連は言葉以上のものでアメリカと対立するなんらかの方法を考えざるをえなかつた。ソ連はカリブ海地域へのアメリカの干渉に対しては有形で効果的な抑止力を樹立しなければならぬ。精確にそれはなんであるか。その論理的回答はミサイルである。アメリカは既に自己の爆撃機とミサイルとの基地をもつてソ連を包囲している。ソ連は西ドイツはいふまでもなく、トルコやイタリアにおけるアメリカのミサイルが、ソ連を指向していることを知っている。ソ連の重要な工業中心地は原爆で武装された飛行機と核弾頭をつけた誘導ミサイルで直接脅威されている。しかし私が内

閣會議の議長として困難な立場におかれたわけは、一方においてアメリカの脅威に答え、他方において戦争をさける行動を決定しなければならぬからであった。

「私がアメリカに発見されることなく、発見されたときは遅過ぎて、もはやどうすることもできない状況の下に、キューバに核弾頭をつけたミサイルを設置する考えをもったのはブルガリア旅行中のことであつた。私の考えはソ連が秘密裡にミサイルを設備し、アメリカがこれを発見した時は既に発射の段階になっていれば、アメリカは軍事的手段でこれを清算せんと試みることに二の足を踏むであろう。アメリカはミサイル設備の若干をノックアウトできても全部はできない。四分の一いな一〇分の一でも残っていればニューヨークを攻撃できる。すべての人ではないが恐るべき多数が死滅させられる。ともかくソ連がキューバにミサイルを設備すれば、カストロ政府に対しアメリカが軽卒に軍事行動をとることを抑制するのみならず、ソ連のミサイルは西側との『権力の均衡』をはかることができる。アメリカは軍事基地でソ連を包囲し、核兵器でソ連を脅威しているが、今や敵のミサイルがアメリカを指向していることが、どんなものかを学ぶだろう。今やまさにアメリカは自己の領土と人民が脅威されることが、どんなものであるかを学ぶべき時である。こんな考えをもってブルガリアからモスクワに帰り、政府部内で討議を重ねた結果、『中距離ミサイルとその発射設備並にイリュージン二八型の爆撃機』をキューバに送ることに決定した」とある。

四 アメリカ警戒態勢に入る

一九六二年九月四日ケネディ大統領は記者会見で、「すべてのアメリカ人と西半球のすべての友人たちは、ソ連がキューバのカストロ政権の軍事力を支持する最近の動きに関心をもってきた。種々の方面からアメリカに到達する

情報は、ソ連がキューバ政府に航続距離二五マイルの対空防衛ミサイル若干を提供した事実が疑いの余地なく確立された。これらミサイルの操作に必要なレーダーその他の電子装置もキューバに提供されつつあること明かである。アメリカはまた射程一五マイルの船舶対船舶の誘導ミサイルを発射しうる、ソ連製の水雷艇がキューバに存在することも確認できた。更に約三千五百名のソ連の軍事技術者が、現在既にキューバにいるか、赴任の途中かにあるが、かれらが装備の建設とその使用を援助するためたることはいうをまたない。

「故にもしソ連圏から提供されたこれらの『攻撃的な地対地ミサイル』その他の重要な攻撃的能力が、キューバ人の手中かソ連の指揮指導下にある証拠があれば『最重大な問題』が発生する。

「キューバ問題は平和に対する共産主義者の脅威が提起した『全世界にわたる挑戦の一部』とみなさねばならない。かくキューバ問題は、より大なる問題の一部としてのみならず、永年の特性をもつ米州諸国間の特殊関係をも考えて処理しなければならぬ。

「カストロ政権が武力または武力の脅威によって、その侵略的目的の『輸出』(注。対中南米)を許さないのがアメリカの政策である。西半球のいかなる部分に対するカストロ政権の行動は、必要などんな手段によってもこれを阻止する。アメリカは西半球の他の諸国とともに、キューバの軍備増大は不幸なキューバ人自身に対する重い負担以外のなものでもありえないことを確実にする」と声明したのである。

大統領顧問ソレンセンによると七、八月中に共産ブロックの傭船百隻以上が、キューバの港に荷卸をしている。キューバ向けのソ連船は全部アメリカの海軍と航空機が撮影していた。キューバ全島に対する空中偵察飛行は毎月二回行われていた。それが毎日キューバに関する特別情報が要求されるに至ったのは八月二七日からである。

二 事態の悪化を達観した大統領は、九月七日、退役軍人を一二月を超えない期間、現役に復帰を命じうる権限を議会に要求し、理由として「自由世界のいかなる部分に行われるかも知れない挑戦に対し、迅速かつ効果的な応答を許す必要による」とのべ、議会の迅速な支持を希望した。

三 上院議員ダークセン（野党院内総務）もこの日直ちに「今やアメリカと米州機構の構成諸国は、キューバにおける共産政府の存在と、その共産国に対するソ連の兵器と軍事的技術者との提供に直面している。これらの事実は一八二三年のモンロー主義、一九四七年のリオ条約、一九五四年のカラカス宣言（リオ条約に基く共同行動は「共産主義」にも適用あることを規定）に対する故意の挑戦を構成すること、ケネディ大統領が一九六一年四月二〇日の演説でのべたごとく『たとえ西半球の諸国が、外部からの共産主義者の浸透に対し、かれらの公約を履行しなくとも、アメリカは自己の公約を履行しなければならない』と声明した。

四 ソ連政府はこれに対し九月一日長文の声明書を発表し「アメリカの好戦的反動分子がアメリカの議会と新聞とにおいて、キューバに対する無拘束な宣伝を展開し、キューバに対する攻撃、キューバ人民に必需物資と食糧品を運搬するソ連船に対する攻撃、すなわち戦争を要求しつつある。ソ連は当初この宣伝を無責任な連中の仕業と見て格別重要視しなかったが、今や無視できないわけは大統領が一五万の退役軍人の現役復帰を議会に要求したからだ」と前提し「ソ連はキューバ政府の要請でキューバ経済の向上を援助するため、農耕学者、機械の運転者、トラクターの操縦者、家畜の専門家をキューバに派遣し、更に国営および集団農場の労働者をも送っている」とのべ、同時に「若干量の兵器もソ連から輸送し、その兵器を操作する訓練のためソ連の軍事専門家と技術者を派遣しているが、その数は農工労働者とは比較にならない少数である。キューバに送った兵器と軍事的装備は専ら防衛的目的のもので、アメリカ大統領

領と軍部とは、どんな国の軍部も知っているごとく、防衛手段がどんなものかを知っているはずである。どうしてこんな手段がアメリカを脅威しうるのか」とウソ八分とマコト二分とが同居するソ連式得意の表現で応答している。

ソ連政府のこの声明はやがてアメリカ政府に利用される自縄自縛的な重大な事実を含んでいる。すなわち「ソ連政府はタス通信に、ソ連としては侵略を撃退し、報復的打撃を行うため、ソ連の兵器を他のいかなる国、たとえばキューバに移動さすなんらの必要ないことを報導するよう許可した。ソ連の核兵器は極めて強力な爆発力をもち、ソ連はこれらの核弾頭を運搬する極めて強力なロケットを所持しているので、ソ連の国境を越えた以外の場所に基地を探すなんらの必要もない。もし戦争が引起され、侵略者が一国または他の一国に攻撃を加え、その国が援助を要求すれば、ソ連は『自己の領土』からあらゆる平和愛好国にキューバのみでなく、援助を与える可能性のあることは、既に言明してきたが重ねてここで繰返す。ソ連がかかる援助を行うであろうことは一九五六年スエズ運河地域に英・仏・イスラエルが侵略した当時ソ連がエジプトに軍事的援助を与える『用意』があったことよって疑いない」との意気軒昂たる声明がそれである。しかし「ソ連は何人をも驚かすために言っているのではない。脅迫はソ連外交政策には異質なものである。オドシとユスリとは帝国主義諸国の不可分の一部だ。ソ連は平和の味方で戦争を欲しない」とオドシやユスリはソ連自身の常踏手段だが、それを相手方の仕業にすりかえるのがまたソ連の特技である。ソ連のこの声明には雑多な重要問題が盛込まれているが、アメリカが最も懸念をもった問題はソ連が「西ベルリンの占領制度は清算しなければならぬ」との一節であった。

五 ケネディ大統領はソ連政府の高姿勢で好戦的な声明に顧み、九月一三日の「記者会見で一九五八年キューバが共產主義に走って以来、ソ連の技術者と軍事要員が、キューバ政府の招請でその数を増大しつつあるが、いまだ西半球に

対し重大な脅威を構成していない。もしアメリカがキューバに軍事行動をとる必要を発見すれば、共産主義者がカストロに供給した全部の兵器と技術者とはアメリカの軍事行動の結果を変更もしなければ、その結果の達成に必要な時間を延長もさせない。しかし現在アメリカが一方的に軍事的干渉を行う必要もなければ、正当性もない。だがもしキューバがソ連にとって重要な能力をもつ『攻撃的軍事基地』になった場合、アメリカは自己の安全と同盟諸国の安全を守るため、行わねばならないあらゆることを重ねて明かにしたい」と声明した。

六 アメリカ上院は一週間後の九月二〇日、八六対一票、また下院は九月二六日、三八四対七票の絶対的多数で、次のごとき合同決議を採択した。

一 兵器の使用を含む必要なあらゆる手段により、キューバにおけるマルクス・レーニン主義政権が、武力または武力の脅威によって、その侵略的または破壊的活動を、西半球のいかなる部分に拡大することも阻止する。

二 アメリカの安全を危殆ならしめる、外部から支持された軍事的能力を、キューバに創造または使用することを阻止する。

三 キューバ人民の自決に対する志望を支持するため、米州機構並に自由愛好のキューバ人とともに努力する。

この決議は大統領の希望もあって、その用語はできうる限り概括的で非好戦的なものとし、武力の行使はただアメリカの安全が「危殆」に陥った場合にのみ限られたのである。米州機構の諸国もナトー諸国も、アメリカは多少ヒステリックになっているのではないかとすら感じていたが、米州機構の諸国には「空中監視」を行うことだけは承認さすことができた。しかるに、その空中監視が、やがて事態を劇的に急変さすのである。

五 息詰る一三日間の核危機開始

一 キューバの偵察飛行にU-2の使用は大統領自らの許可を必要とした(過去二回U-2のためソ連との間に事件を引起したからである)。一〇月九日大統領はU-2にキューバ西端の偵察を命じた。主たる目的は、ソ連のミサイルSAMが運用の段階に達しているか否かの情報の入手にあった。西端を選んだ理由は八月二九日の偵察でSAMが同地域にあることを初めて発見したので、それが運用の段階に達する可能性が最も濃厚であったからである。しかし悪天候に妨げられたU-2は、一〇月一四日早朝漸く快晴の西部地域の偵察に成功した。異常に優秀な空中写真の解読者によって、一〇月一五日夕刻サン・クリストバル地域に未完成なソ連の「準中距離弾道ミサイル基地」(MRBM)が発見された。

二 一〇月一六日午前九時頃、国家安全保障問題に関する大統領顧問マックジョージ・バンディが大統領にこの秘報を伝えた。直ちにこの危局に対処する方策を審議する臨時の大統領諮問機関が編成され、実弟の司法長官ロバート・ケネディを初め、「國務省」からラスク長官、ボール次官、マーティン次官補、ジョンソン次官代理、トンプソン(ソ連専門家)、「国防省」からマックナマラ長官、ギルパトリック長官代理、ニッツェ長官補、テラー統合参謀本部議長、マッコーン中央情報部長(CIA)、バンディ、ソレンセン両大統領顧問、ディロン財務長官の一四名が常連として指名され、この外ジョンソン副大統領、アチソン元國務長官、ステイブソン国連大使が時々出席した。

一〇月一六日午前一一時四五分直ちに第一回会合がホワイトハウスの閣議室で大統領司会の下に開かれ、先づ中央情報部長代理から空中写真が提示されたが、「フットボール場の小さなフットボールのようで」やっと見える程度の

ものであった。大統領は同盟諸国を始め世界を納得させうるに足る、十分な証拠をもたねばならないとのべ、キューバ全島にわたる毎日の偵察飛行を命ずると同時に、列席者に対しアメリカがどんな行動をとるべきかの研究を継続するため午後六時三〇分から会議の再開を告げた。

この日午前の会議に現われた見解の一は、ミサイル基地が運用の段階に到達する以前にこれを除去することが目的だから、「空中攻撃」でこれをノックアウトするか、ソ連に圧力をかけて取除かせるかだが、米州機構の視察団を編成するか、直接カストロに接近して除去する方法もあるとのことであった。第二の見解は空中攻撃はミサイル基地のみに限定されえないので、貯蔵基地、飛行場、その他の対象が含まれねばならないから、数千人のキューバ人の死者を出すのみならず、おそらくキューバへの侵入を必要とするに至るとあった。第三の見解は「海上封鎖」を行った上、ソ連に警告を与えるとともに監視を増強すべきだとあった。しかしどんな結論にも到達せず、ただガンタナモ海軍基地から家族全部を引揚げさすことに一致したのみである。

三 一〇月一六日午後六時三〇分予定のごとく再び大統領司会の下に閣議室にさきのメンバーが参集した。この会議はこれから一〇月二八日まで「一三日間」、毎日行われる会議の第一回であつて、しかも「ケネディ大統領時代の他のいかなる会議とも異っているのみならず、核対立に関する最初の会議たる意味において、地球の歴史における他のいかなる会議とも異つた重大性のものではあつた」とソレンセンは評価している。大統領欠席の場合最も活躍したのはロバート・ケネディであつたが、大統領に代つて司会したわけでもなければ、また必ずしも特定のアイディアを提起したためでもなく、たえず討議進捗を刺激し、質問を行い、議論を釣り出し、具体的な対策の選択を求めてやまない貴重な存在であつた。大統領不在の場合は國務省七階のボール次官の部屋で会議を継続した。時間の経過とともに

空中撮影者の不眠不休の活動は、対策の審議者により大なる緊迫感を与えた。それは新たに三カ所の準中距離弾道ミサイル基地が発見され、合計「六カ所の基地」になったことであつて、もはや最も練達した専門家でなければ発見しえないものになった。この数日間における基地建設工事の進捗状況は、一〇月一六日にアメリカが予想したよりも、遙かに早く運用の段階に到達せしめんとするソ連の意図に誤りありえないことを立証した。毎日六回または七回の空中撮影飛行によつて、今や射程二、二〇〇マイルの「中距離弾道ミサイル」(IRBM)基地の穴掘作業が発見されるに至つた。これが完成すればアメリカの全土が射程内に入る。またこれらの地域では数日前まで野原か森林であつたものが、突然道路網に転化し、しかも作業員は全部ソ連人のみであつて作業は嚴重にソ連人に監視されていた。もはや時間がなくなりつつあることを知つたアメリカ側では、毎日夜遅くまで会議を続けることになった。コースの偵察飛行を増加したことがソ連を驚かした様子はないが、大統領としてはアメリカがすべてを知つていることをソ連が知る以前に、またこの問題が外部に洩れない以前に、殊にミサイル基地が運用段階に到達する以前に、アメリカの立場を決定してこれを声明しなければならぬのであつた。だが、大統領によると「アメリカがどんな行動をとるにせよ、それぞれ多くの不利が伴つてゐること、殊にどの行動もソ連をして核戦争にエスカレートせしめうる可能性をもつこと」に対策決定の困難性があつた。

四 一〇月一六日から一九日までボール次官の会議室で、大統領が要求したアメリカの取るべき、あらゆる可能なコースを論究したが、それらのコースは次の六種のカテゴリーに分類できる。

- 一 なにごともしないこと。
- 二 ソ連に「外交上の圧力」を加え「警告」を与えること。その形式は国連または米州機構に訴え現地の視察団を編成さすか、

直接フルシチヨフに接近して首脳会談に持込むかである。ソ連が代償としてトルコにおけるアメリカのミサイル基地の撤去を要求する可能性も考慮した。

三 秘密裡にカストロに接近し、かれをソ連から引き離す手段を用い、ソ連から離れなければ、キューバは滅亡し、ソ連はかれを裏切ると警告すること。

四 「封鎖」という間接的な軍事行動を開始し、これに随伴して空中監視と警告とを増強すること。なお封鎖の実施に関する多くの型を審議した。

五 「空中爆撃」を行うこと。予告を与えるか、または与えずして、ミサイル基地のみか、または他の軍事目標をも攻撃すること。他の軍事的手段としては(一)小弾丸による攻撃を行い、致命的でなくミサイルの機能を失わしめること、(二)落下傘部隊か、ゲリラ部隊を奇襲上陸させて、ミサイルを取除くことが考えられたが、いずれも実行不可能とみなされた。

六 キューバに「侵入」を敢行すること。この説の主張者によると、ともかくキューバに行つて、「キューバをカストロから奪えばよいのだ」というにあった。

この外のコースとしては国家非常事態の宣言、フルシチヨフの許に特使の派遣、キューバに対する戦争宣言を議会で要求することなどが提起された。

これら六種の選択が諮問委員会の審議の中心であった。第一案の「無為放任説」と、第二案の「外交的行動説」とは真剣に審議され、殊に第二案に関してはペンタゴンの委員の一部から大統領に、アメリカはこれまでも永い間、現実にソ連のミサイル射程内で生活してきている、とのべる者すらあったほど魅力的であった。しかし大統領が当初から第二案を拒否した理由は、「ミサイルの軍事的意義よりも、その世界的バランスに与える効果に関心をもったからであつて、ソ連がかくも迅速かつ秘密裡に念入りな故意の詐欺手段に訴えて、ミサイル基地設置を成遂げんとするこ

とは、米ソ間に微妙につくられているバランスの現状を挑発的に変更せんがためである。ソ連の領土内またはソ連の潜水艦内に備付けられたミサイルと、西半球の諸国に政治的、心理的効果を与えるソ連のミサイルとの間には甚大な差異がある。弱小国に対するソ連の歴史は、アメリカのそれとは著しく異っている。こんな措置を容認すれば、これから後ますます同種の挑戦が続出するから」というにであった。大統領としては軍事行動と同時に外交上の工作を行うことは欲するが、現にミサイルが運用の段階に到達しつつある危急の場合に、国連で討議させたり、フルシチョフにごまかしの発言を許す機会を与えることを欲しなかった。

第三案のカストロ接近策に対する大統領の見解は、「今回の問題は米ソ両大国間の対立たる事実をさげえないのであって、現にソ連のミサイルがキューバに設備され、そこにソ連人が配置され、それがソ連人に警備されているのだから、アメリカの直接行動に基きソ連人自身によって撤去させねばならない」との考えであった。第六案の「キューバ侵入」の支持者は驚くほど少く、大統領も「それは最後の手段で最初であってならない。準備はすべきだが差控えておくべきだ」との見解であった。殊にこの案は他のどのコースよりも、世界戦争を賭する危険があり、「ベルリン」その他の地域に対する「ソ連の報復」を引起し、アメリカの対南米政策を破綻させ、歴史をしてアメリカを侵略者と判定せしめざるをえなくするからであった。

五 諮問委員会の審議は結局「空中爆撃」か「封鎖」かの選択に集中された。当初は大統領を含め空中爆撃説が有力であった。前國務長官アチソンも熱心な空中爆撃主張者だったがこれには重大な困難が伴うことが明かになった。第一は攻撃目標をミサイル基地のみに限定できないことであって、それを限定することは、軍事上受諾し難い危険を冒すことになる。第二は爆撃に先立ち警告を与えることに種々の不利益が伴うので採用できないが、さりとて無警告

な奇襲攻撃はそれに劣らぬ不利益がある。ロバート・ケネディが大統領に「東条英機が真珠湾の攻撃を計画しつつあった当時の心境を知りえた」との紙片を手交したのもこの頃のこと、アメリカの歴史に汚れを残すことになる。第三に空爆はキューバ人のみならず多くのソ連人を殺さざるをえないが、それはソ連の軍部を挑発しフルシチョフに堪えがたい屈辱を与えることになるとの反対論であった。かくしてこの「外科手術的」な空爆説は不可能事として遠ざけられ、「二〇月一八日」には「封鎖説」に傾いたが、いまだ全員一致でなく空爆論者は依然強力であった。

封鎖とは戦時国際法上の制度であって、交戦国が海軍力によって行い、敵国の海路による兵器その他の軍需物資の輸入を遮断する手段の一であるが、中立国の権利と利益に影響することを甚大なため極めて嚴重な条件の下においてのみ許されている。しかし現在では大型航空機と大型潜水艦の出現により、伝統的な封鎖制度では目的を達成しえない状態にある。ともかくアメリカは戦争を宣言せずして、国際法や国連憲章に違反する、キューバの海上封鎖を行わんとするのであるから、同盟国や友邦の支持をえられない心配があった。それよりもソ連がどんな報復的反応を示すかが、より重大な関心事であった。

六 たまたま一〇月一八日はかねて大統領がグロムイコ外相引見の約束日であった。大統領の側近者たちは大統領にアメリカが既に知っているソ連の動きをグロムイコに洩らさないよう進言した。それは過去二日間に入手した情報だけでは不完全であり、毎日新しい情報が現われつつあるのみならず、アメリカがどんな行動をとるかがまだ未決定だからであった。ドブリニン大使を伴ってホワイトハウスに現われたグロムイコ外相と、つとめて笑顔で迎えた大統領との会談の最初の問題は「ベルリン問題」であって、ソ連はこれまでよりも強硬な態度をとった。次いで「キューバ問題」に移るやグロムイコは「キューバに対するソ連の援助は既にソ連政府が明かにしたごとく、専らキューバの防衛能

力と、キューバの平和経済発展とに貢献する目的の追求にあることを明かにするよう政府から訓令された。『防衛的兵器の操作にソ連の専門家がキューバ人を訓練することは決して攻撃的ではない。』もしそうでなかったならば、ソ連政府は決してかかる援助の供与にかかりあわなかったであろう」とのノートを読み上げた。大統領は無感動を装いソ連がまたしても詐術を弄すると考えたが返事もしなれば怒りも緊張もしなかつた。しかし「グロムイコを誤解させないため、大統領は特に自身が九月四日記者会見で行った警告的声明を読み上げた。実は二日以前の一〇月一六日モスクワでも新任のアメリカ大使コーラーを引見したフルシチョフが同様な詐術を行い、「ソ連がキューバに『漁港』をもつたことが、『潜水艦の基地』と誤報されているが、この漁港取得のことを今日まで発表を差控えていたのは、選挙中のケネディを煩わさせないためである。キューバにおけるソ連のすべての活動は防衛的性格のものだ」と鉄面皮にデタラメなウソをのべ、「アメリカもトルコとイタリーにミサイル基地をもつではないか」と鋭く言及した一幕である。

七 今や封鎖説が多数を占めるに至ったがいまだ最終的決定ではなかつた。しかし一〇月一八日午後二時三〇分最終的決定を下す正式な「国家安全保障理事会」が開かれ、大統領の面前で「封鎖」か「空爆」かの選択論が展開され、封鎖論者はいかなる行動をとるにせよ共産主義者の「報復」という「代価」を支払わねばならないが、「ミサイルの撤去」というアメリカの制限的目標は、封鎖によって最低の代価で獲得できると主張し、空爆論者は空爆によってカストロを崩壊に導くことが最も直接的かつ効果的手段だと主張した。暫く沈黙が支配した。するとギルパトリック国防次官が「大統領、この問題は本質的には制限的行動か、無制限的行動かの選択だが、われわれの大多数は制限的行動から出発するのが、よりよいと考えている」とのべた。大統領はうなづいたが、なお最終的決断を下すに先ち空軍の戦術爆撃軍司令に対し、純然たる「制限的爆撃」は不可能かとたしかめた後、「制限的行動たる封鎖で出発す

べきだが、空爆と侵入の主張者もそれら二つの選択が将来にわたって除外されるものと理解しないでほしい。封鎖は自分にもフルシチョフにも選択の余地を残す利益がある。それは核大国間には重要であって、自分はカストロ相手ではなく、他の核大国を相手にしているのだ」とのべ、「こんな危局に当ってアメリカ自身の死活的利益を防衛するため、核大国たるものは相手方に『屈辱的退却』か、『核戦争』かの選択を強要する対立をさけなければならない」と後に述べられている。戦争における「交戦権」の一形態たる「封鎖」なる文字をさけ、「平和的自己保存権」(an act of peaceful self-preservation)の発動として、「隔離」(quarantine)なる言葉を使用することに決定した。一〇月二一日大統領は海軍軍令部長に封鎖の実施方法の説明を求めたところ、それは先づ停船を命じて乗船査察を行う。停船命令に応じない船舶には船首に発砲する。なお応じない船舶には、発砲によって舵を不能にするが、沈没はさせないと答弁であった。

六 大統領ソ連にミサイルの撤去を要求

一 一九六二年一〇月二二日午前七時、ケネディ大統領は、過去六日間、アメリカの英知を結集して熟議決定した、キューバからソ連のミサイル基地を撤去せしめうる、具体的方策と、事ここに至った経緯とを、全世界に報告する、次の歴史的放送を行った。放送の原稿は、ソレンセンが起草したものだが、稿を改めること四回にも及んだ、苦心の作品であった。

現在キューバに一連の攻撃用ミサイル基地が準備されつつある事実が、過去一週間内に紛れなき証拠によって確立された。これら基地の目的は、西半球に対する核攻撃能力を提供する以外のなものでもありえない。これらの新ミサイル基地は二つの異なる

った型の施設たることが特徴である。若干の基地は一千海里以上まで核弾頭を運びうる準中距離弾道ミサイルを含み、ワシントン、パナマ運河、メキシコ市などがその射程内にある。他の基地(複数)は未完成だが中距離弾道ミサイルのために計画され、二千海里以上まで運航しうるもので、西半球における主要都市の大半、北はカナダのハドソン湾、南はペルーのリマまで攻撃できる。更に核弾頭を運びうるジェット爆撃機が今やキューバで包装を解かれ組立てられつつあると同時に、それに必要な飛行場が準備されつつある。

かくてキューバが明かに攻撃用の大型長距離兵器の存在によって、急速に重要な戦略基地に転換されたことは、全米州諸国の平和と安全に対する明白な脅威を構成し、一九四七年のリオ条約、アメリカと西半球の伝統、第八七議会の合同決議、国連憲章、私自身ソ連に与えた九月四日と一三日の公開警告を明白かつ故意に無視したものである。

ソ連のこの企てはその規模から見て数カ月以前から計画されたことが明白にもかかわらず、ソ連が公然と声明したのは九月一日であって、私が「地対地ミサイル」の導入と、防衛的な「地対空ミサイル」の存在との差異を明かにした以後のことである。九月一日のソ連声明によると「キューバに送った兵器と軍需物資は排他的に防衛目的のためであり、ソ連は報復用にその兵器を他のいかなる国、たとえばキューバに移すなんらの必要なく、ソ連はまたこれらの核弾頭を運ぶ極めて強力なロケットを所持するため、ソ連の国境を越えて他国に基地を探すなんらの必要もない」とある。しかしこれらの声明はウソであった。

キューバにおける攻撃用装備の急速な増強に関する証拠が既に私の掌中にあつた一〇月一八日、グロムイコ外相は私の執務室において、ソ連政府が既に行ったことを今一度明かにするよう訓令されたとして、「ソ連のキューバに対する援助は専らキューバの防衛能力に寄与する目的の追求であつて、ソ連の専門家が防衛的兵器の操作にキューバ人を訓練することは決して攻撃的でない、もしその兵器が攻撃的であつたならば、ソ連政府は決してかかる援助の供与に関係しない」と私に告げた。しかしこの発言もウソであつた。

アメリカも国際社会も、大小いかなる国が行うにせよ故意に詐欺を行つたり、攻撃的な脅迫を行うことは許しえない。人類は

もはや兵器の現実的な発砲のみが一国の安全に対する最高危険を構成する挑戦たる世界に住んでいない。核兵器はあまりにも破壊的であり、弾道ミサイルはあまりにも迅速であって、これらの兵器を使用する可能性が実質的に増大するとか、かかる兵器の展開に急激な変化のあることは、平和に対する決定的な脅威とみなしてしかるべきである。

この事実を多年にわたって認めてきたアメリカとソ連は、重大注意を払って戦略的核兵器の展開を行ってきた。すなわち「これらの兵器はなんらか死活的挑戦のない限り使用しないことを確保した現状を顛覆しない」ことがそれである。アメリカ自身の戦略的ミサイルは秘密や詐欺を装っていかなる他の国の領土にもかつて移転したことはない。アメリカの歴史は第二次大戦後のソ連の歴史とちがって、他のいかなる国をも支配するとか、征服するとか、またはかかる国の人民にアメリカの制度を押し付けることを望まなかったことを実証している。それにもかかわらずアメリカ市民は、毎日、ソ連の国内かソ連の潜水艦内に設備されたソ連のミサイルの標的としての生活に順応させられてきている。

この意味においてキューバのミサイルは危険を追加するもので、殊にラテン・アメリカの諸国がかつて核脅威をうけなかったことは注意すべきである。しかるに共産主義者が秘密裡に迅速かつ異常なミサイルの増強を行ったことと、ソ連が突然かつ秘密裡に初めてソ連の領土以外に戦略的兵器を展開する決定を行ったこととは、現状を故意に挑発的かつ不合理に変更するもので、アメリカにとって、その勇氣と公約が敵にも友にも信用されんとするならば、受諾できないことである。故にアメリカ不動の目標は、これらのミサイルがアメリカその他いかなる国に対しても使用されることを阻止し、西半球からこれらミサイルの撤去または排除でなければならぬ。

アメリカの政策は忍耐と自制のそれであって、早まったり不必要に全世界的核戦争の危険を賭してならない。さりとしてそんな戦争に直面を余儀なくされるれば、いつでもその危険を賭すことを尻込みしてならない。

それがためアメリカ自身の安全と西半球全体の防衛のため、議会の決議で保証され、憲法で私に委ねられた権威の下に、私は直ちに次の第一段階の措置をとることを指令した。

第一 この攻撃的装備増強を停止するため、キューバ向け海上輸送中のすべての攻撃的軍事装備に対し、嚴重な「隔離」を開始する。どこの国、どこの港からにせよ、キューバ向けのあらゆる種類のすべての船舶にして、攻撃的兵器を積荷に含むことを発見すれば、その船は引返えさせる。この隔離は必要に応じ他の型の積荷と運搬者に拡大する。しかしアメリカは一九四八年ソ連がベルリン封鎖の際、企てたような生活必需品は拒否しない。

第二 私はキューバとその軍事的増強とに対する嚴重な監視を継続かつ増大するよう指令した。もしこれらの攻撃的軍事準備が継続して、西半球に対する脅威が増大すれば、これ以上の行動が合法化される。私は軍隊にいかなる不慮な事件に対しても備えるよう指令した。私はキューバの人民とその基地にいるソ連専門家との双方のために、この脅威の継続がすべての関係者に危険たることが認められていると期待する。

第三 西半球のいかなる国に対するにせよ、「キューバから発射された、いかなる核ミサイルも、それがソ連によるアメリカに対する攻撃とみなされ、ソ連に対する全面的報復反応が要求される」のが、アメリカの政策でなければならない。

第四 必要な軍事的予防措置として、ガンタナモ基地を増強し、基地要員の家族を引揚げさせ、増員した部隊に待機警戒態勢にあることを指令した。

第五 アメリカは今夜即時米州機構の会合を求めたが、目的は西半球の安全に対する脅威を審議し、必要なすべての行動を支持するため、リオ条約六条と八条に訴えるためであった。国連憲章は地域的安全保障協定を認めているが、西半球の諸国はずっと昔から外部の大国の軍事力の存在に反対を決定している(註。モンロー主義を指す)。全世界にわたる他の「同盟諸国」に対しても警戒警報を行った。

第六 アメリカは世界平和に対するソ連の脅威に対し行動をとるため、国連憲章の下に今夜安全保障理事会の緊急会合を求めた。アメリカの決意は隔離を解除しうるがため、国連オブザーバーの監視下に、キューバにおけるすべての攻撃的兵器の即時解体と撤去とを要求するにある。

第七 私はフルシチョフ議長に世界の平和と米ソ両国間の安定関係とに対する、この秘密にして向う見ずな挑発的脅威の停止と除去とを求め、私は更に同議長にかかる世界支配のコースを放棄し、危険な軍備競争に終止符をうち、人類の歴史を転換する歴史的努力に参加するよう求める。同議長は今や世界を破滅の深淵から引戻す機会をもっている。それはソ連が自己の領土以外にミサイルを展開する必要ない、とのソ連政府自身の言葉に立帰って、キューバからこれらの兵器を撤去することであり、現在の危機を拡めたり深めたりするいかなる行動も慎んで、平和的恒久的解決の探求に参加することである。

アメリカはソ連との戦争を望んでいないが、脅迫の雰囲気内では諸問題の解決はもちろん討議すら困難である。これソ連最近の脅威に対しアメリカが決意をもって対処しなければならぬし、また対処するつもりである。アメリカが公約を与えている人民、特に「西ベルリン」の勇敢な人民の安全と自由に対する敵対的運動には必要などんな行動をもっても対処する。

アメリカが着手した努力は困難かつ危険で、何人もそれがどんなコースをとり、どれほどの死傷者を出すか精確に予見できないが「最大の危険」はなにごともしないことである。アメリカの選んだ路は危険にみちているが、これはアメリカが民族としてまた世界に与えた公約に照し、アメリカ人の性格と勇氣とに最も合致している。自由の代価は常に高いがアメリカ人は常にそれを支払ってきた。アメリカが決して選んでならない一つの路は降伏と服従である。アメリカの目標は力の勝利ではない。それは正義の擁護である。自由を犠牲にした平和ではなく、自由と平和を合わせたものだ。

二 大統領声明の眼目は第三項に基く決意にあるが、この日アメリカ政府は国連安全保障理事会の緊急招集を要求すると同時に、理事会の決議事項として次の項目の実施を提議した。

- 一 キューバにおけるすべてのミサイルと攻撃的兵器の即時解体と撤去とのため、国連憲章第四〇条に基く暫定措置を要求する。
- 二 国連事務総長代行に国連視察団をキューバに派遣して、この決議に合致するか否かを確め報告さすことを要請する。
- 三 国連から本決議第一項に合致したとの証明があれば、キューバ向けの軍事輸送に対する隔離手段の終了を要求する。

四 アメリカとソ連が西半球の安全と世界の平和とに対する現在の脅威を除去する措置を直ちに協議し、それに関する報告を安全保障理事会に行うことを緊急に勧告する。

翌一〇月二三日ソ連政府もまた国連安全保障理事会の招集を要求すると同時に、ソ連の立場を説明する声明書を發表し、「ソ連のキューバに対する援助は排他的にキューバの防衛能力改善の目的であつて、一九六二年九月三日ゲバラとアラゴーンで構成するキューバ代表団がソ連訪問の節、ソ連とキューバ間の共同コミュニケにあるごとく、ソ連政府は武器をもつてキューバを援助するキューバ政府の要請に答えた。コミュニケにはかかる兵器と軍需品が専ら防衛目的を意図するとある。両国政府はその立場を堅く守っている」とのべている。

七 国連事務総長の斡旋

一九六二年一〇月二四日ウ・タント国連事務総長代行は事態の重大なるに驚き安全保障理事会議長に対し、ケネディ大統領とフルシチョフ議長とに宛てたメッセージを含む次の声明書を送致した。「今日の国連は容易ならざる責任に直面している。危くなっている問題は、直接の関係当事国の利益のみでもなければ、国連加盟国全部の利益のみでもなく、人類の運命そのものである。もし今日国連がそれ自身の無能を証明すれば、将来もずっと無能だと証明することになりうる。かかる事態の下に私が国連事務総長代行としてのみならず、一個の人間として、私の深甚な希望と所信を表明しなかつたならば、私は自分の義務を怠ることになる。その希望と所信とは適度、自制、良識が他のすべての考慮に優先することである。人類の存在そのものが賭けられている現下の事態において、私は安全保障理事会に提出された決議案に若干の共通基盤の存在する事実から多少の慰めをえたことである。これらの決議案の運命い

かんに関係なく、その共通基盤は残存する。その共通基盤とは至急に直接関係当事国間に交渉を行うことを要求していることである。全世界の他の諸国も利害関係国たることは前述の通りである。これに関連して私は、安保理事会が承認を求められている若干の措置は、戦時を除けば極めて珍しいもの、いな異常といたいものとの見解を表明せざるをえない。そこで私は多数の国連加盟国政府の常駐代表者の要請に基き、次の同文のメッセージをアメリカ大統領とソ連内閣会議議長とに送った」とある。

私は多数の国連加盟国の常駐代表者から現下の危局に際し貴下に緊急の訴えを行うよう要請された。これら代表者の所感によると、すべての関係国は国際の平和と安全のため、事態を悪化し、それがため戦争に導くような、いかなる行動も慎むべきである。代表者たちの見解によると、当事国をして現下の危機を平和的に解決し、カリブ海における事態の正常化を目的とする、相談を可能ならしめる時間を与うべきである。これは一方においてキューバへのすべての兵器の輸送を自発的に停止することを必要ならしめ、他方においてはキューバ向けの船舶搜索を伴う隔離手段の自発的停止を必要とする。私の所信によると、かかる自発的停止を二、三週間も行えば、事態は大いに緩和され、関係当事国に問題の平和的解決を発見する目的で会合し討議する時間を与える。それについて私はすべての当事国に、私にできうるどんな奉仕でも喜んで提供しなければならぬ。私は貴下がこのメッセージに即時考慮を与えられるよう緊急に訴える。

ウ・タントは更にこの声明書において、二週間以前キューバの大統領が国連総会の壇上で「もしアメリカが言語と行為とによって、私の国に対し侵略を行わない証拠を与えうるならば、われわれは今日この場所でみなさんの面前で、われわれの兵器は不必要であり、われわれの軍隊はよけいなものだ」と厳粛に宣言する」とのべたことを引用し、「ここにもまた私は討議の基礎に関し若干の共通基盤が発見され、それによって現下の行詰りから脱却しうる方途が画策

できるかも知れない。もしまたキューバにおける主要軍事施設と装置との建設と発展とが、交渉の期間停止されうるならば、同一目的に貢献すること大であると信ずる。私は関係当事国に対し、即時できうれば今夜でも、他のいかなる議事手続にもお構いなく、交渉に入ることを最も厳粛に訴える。第二次世界大戦終了後一七年間、主要大国間に今回のような危険な接触した対立はかつてなかった。そんなわけで私は篤と熟慮した結果、前述の二つのメッセージを送ることを決意すると同時に、キューバの大統領と首相への訴えを含め安全保障理事会に先ち簡単な干渉を決意した。私はこの瞬間安保理事会のみならず、外部の全世界においても、良識と理解とが一時の怒りや国家の誇りの上におかれることを希望する。交渉と妥協の途こそ、この危険な瞬間に際し、世界の平和を確保しうる唯一のコースである」と結んでいる。

二 翌日(一〇月二五日)ケネディ大統領はウ・タント代行に対し、アメリカは「安保理事会で明かにしたごとく、現在の脅威はキューバに攻撃的兵器が秘密裡に導入されたことによつて創り出されたもので、その回答はかかる兵器の撤去にある。貴下のメッセージと貴下の安保理事会への声明書には、若干の提案と満足な取極が確保できるかを決定する予備会談の勧告があつた。これらの取極についてはスティブソン大使が貴下と討議する用意がある。私は本件が満足な平和的解決に達するアメリカの願望を貴下に保証する」との回答を与えた。この日フルシチョフ議長からもウ・タント代行に対し、「私は貴下の訴えを接受し、それに含まれる提案を慎重に検討した。私は貴下の發議を歓迎する。私はカリビア海における事態に対する貴下の関心を理解する。理由はソ連政府もまたその事態が極めて危険であつて、直ちに国連の干渉を要求すると考えているからである。私は平和の利益と一致する貴下の提案に同意することを報告する」との回答を与えた。

三 この日（一〇月二五日）ウ・タント代行は重ねてケネディ大統領に対し、「本日私はフルシチョフ議長に対し、既にキューバに進航中のソ連船舶が、アメリカの実行する隔離に挑戦し、ソ連船と米国船が海上で対立し、それが事態の悪化に導きうることに對する私の深甚な関心を表明したメッセージを送った。もしそうになると私が平和的解決に關する交渉の前提として提議した討議の可能性を破壊する。そこで私はソ連船に一定の制限期間のみ禁止区域から遠くよう訓令されたいとの熱心な希望を表明した。それで米国船にもここ数日間ソ連船との直接の対立をさけるため、あらゆる可能なことをなすよう訓令されたいことを貴下に訴えたい。もしアメリカ政府がこの訴えを容れらるれば、私は不幸な事件をさけるためアメリカ側の協力をえたことをフルシチョフ議長に報告できる」と申入れた。

これに對しケネディ大統領はこの日直ちにウ・タント代行に對し、「もしソ連が貴下の要請を受諾し堅守するならば、アメリカ政府も貴下の要請を受諾し堅守する。しかし本件は若干のソ連船が依然としてキューバに向い禁止区域に進行中たる事實に顧み、極めて緊急を要する問題たることをご報告しなければならぬ。私はフルシチョフ議長が貴下の訴えに留意し、キューバにおけるこれらの攻撃的軍事組織が、平和に對する脅威に終止符をうつため、撤去される要求を充すよう緊急に進みうる希望を貴下と共にするものである。しかし私は貴下にこれらの軍事組織に關する作業は依然として継続中なることを指摘せざるをえない」と回答した。

その翌日（一〇月二六日）フルシチョフ議長はウ・タント代行に對し、「一〇月二五日の貴下の電信を受領研究し、平和保持に對する貴下の切望を理解し、軍事的衝突をさげんとする貴下の努力を高く評価する。故にわれわれは貴下の提議を受諾し、キューバ向けのソ連船舶にして、いまだアメリカ軍艦の海賊的活動区域以内にいないものに、貴下の勧めたごとく禁止区域外に停まるよう船長に指令した。しかしソ連がこんな指令を出したのは、アメリカ側が公海で

船舶を移動不能にさせる事態は、純然たる一時的のことであり、どんなことがあっても、その期間は長期でありえない事態を理解するよう希望する」と回答した。

八 西巨頭直接の書簡交換

一九六二年一〇月二六日フルシチョフはケネディ宛二通の書簡を送ったが、第一信(「コングレッショナル・クォーター」によると、この第一信はアメリカが海上封鎖を解除し、キューバへの不侵入を保証すれば、ソ連はキューバからミサイルを撤去するとの譲歩的なものであったが、第二信ではアメリカもトルコからミサイルを撤去する条件が付加されたとある)は公表されず、第二信で次の趣旨の提案を行った。

米ソ両国船舶の接触をさけ、それによって取返しをつかない結果を免れる措置をとることに関するウ・タント宛貴下の回答を検討して私は非常に満足する。貴下はソ連がキューバの防衛力強化を目的とする兵器を供給してキューバを援助することを心配されているが、キューバがどんな兵器をもったにせよ、アメリカとは比較にならないわけは、次元がちがうからであり、殊に最新式の大量殺戮手段を考えればますますそうである。すべての国は危険から自らを救わんと欲している。ソ連とその同盟諸国を軍事基地で包囲し、その基地にロケット兵器を装備しているアメリカの行為をソ連はいかに評価してよいか。イギリス、イタリア、トルコに配置されたアメリカのロケットはソ連に指向されている。貴下はキューバがアメリカの海岸から海上九〇マイルにあると理由で心配されているが、トルコはソ連と国境を接し両国の番兵は国境で互に警戒しつつある。貴下はソ連にはそんな権利を認めずして、アメリカの安全保障のため貴下が攻撃的とみなす兵器の撤去を要求する権利があると信じますか。そこで私の提案は、貴下が攻撃的兵器とみなす兵器をソ連はキューバから撤去に同意し、その公約を国連において声明するから、アメリカ代表も国連においてソ連が不安とするトルコからの類似の兵器を撤去する声明を行い、次いで米ソ両国はいつこれを実行に移すかの時期を

取極め、国連安保理事会にこの公約履行の現地管理を行わしめる。キューバとトルコの両政府が国連監視員の入国を許すことが必要だ。更に米ソ両国はトルコとキューバに希望を与えるため、ソ連はトルコの国境保全と主権との尊重、トルコへの内政不干渉、トルコへの不進攻などの約束を、国連安保理事会で声明するから、アメリカもキューバに関して同一の声明を行うことを提議する。

もちろんこれらのことは貴下との協定に達しなければならぬが、一カ月以内で二、三週間ではどうでしょうか。貴下の心配されるキューバにおける兵器は、ソ連将校の掌中にあるので、いかなる偶発的使用もアメリカに損害を与えることは排除される。私のこの提案が受諾されるれば、国連にソ連の代表者を派遣する。

二 この日フルシチョフ書簡を接受したケネディは「私の理解する限り大体受諾できそうな貴下の提案の骨子は、(一)ソ連が国連の適当な視察監視の下にキューバから攻撃的兵器を撤去すること並に適当な保証下にかかる兵器のキューバ導入を中止することに同意する、(二)アメリカ側においては現在実施中の隔離措置を直ちに撤去し、キューバ侵入を行わない保証を与え、その公約実行を確保するため国連を通じて取極を結ぶことに同意するにある。かかる取極を完了して二日以内に、全世界にこれを披露しえないなんらの理由もない。しかし最先の要素は効果的な国際的保障下に、キューバにおけるミサイル基地建設作業を中止し、かかる兵器を使用不能にする措置をとることを強調したい。この脅威を継続さすとか、この問題をヨーロッパおよび全世界の安全保障問題と結びつけて、キューバに関する討議を引延すことは、キューバの危機を激烈な事態に導き世界平和に甚大な危機を与えること必然である。この理由によりこの書簡と一〇月二六日の貴簡とに示されたラインに沿って直ちに合意に達することを希望する」との返簡を一〇月二七日フルシチョフに送致した。

三 大統領はこの返簡の発送と同時に、ロバート・ケネディに命じ、ドブリニン大使を招き、大統領が非常に心配している旨を伝えるよう決定した。一〇月二七日午後七時四五分司法長官の事務室に現われたソ連大使に対し、ロバート長官から「アメリカはキューバにおけるミサイル基地の建設工事がつづけられていること、並にそれが最近数時間急ピッチで行われていることを知っていると告げ、更に今朝C-130機のアンダーソン少佐が、SAM(地对空ミサイル)に命中して機は墜落、少佐は死亡したと告げ、ソ連がだますからアメリカはキューバ上空の偵察飛行をつづけざるをえないが、キューバ人がソ連人が飛行機に発砲すればアメリカ側も反撃を行わざるをえなくなり、他の新事件の発生を不可避にし、衝突をエスカレートすれば、その意味するものは極めて甚大ならざるをえないと警告したところ、ソ連大使からキューバ人は上空侵犯に憤慨していると答えたので、ロバート長官はもしアメリカがキューバの上空を侵犯しなかったならば、キューバにはミサイルは存在しないとフルシチョフの言葉をまだ信じていたかも知れない。ともかくこの事件はキューバの上空侵犯より遙かに重大であつて、米ソ両国の人民のみならず、地球上の全人類を巻込むことにならざるをえないと重ねて警告し、ソ連は秘密裡にキューバにミサイル基地を設けながら、公私ともにこれを否定しているが、アメリカとしてはこれらの基地を『明日』までに撤去する公約をうけたい。これは『最後通牒』ではなく事実の陳述である。もしソ連が撤去しなければアメリカが撤去するものと理解していただきたい。多分ソ連は『報復行動』をとると思われるが、それが終るまでにアメリカ人のみでなくソ連人も死んでいるだろう」と申込んだ。これに対しソ連大使は「アメリカはどんな申出をなさんとするのか」とたずねたので、長官は大統領がフルシチョフ宛発送したばかりの書簡の内容を告げたところ、大使から「アメリカがトルコからミサイルを撤去する問題」を提起したので、長官は「この種の脅迫と圧力との下においては、交換条件とか取極などはありえない。その問題は結局ナトー

いているからである。平和維持の重責を担う貴下と私は、事態の発展が收拾不可能になりえたであろう点まで接近しつつあったことを、よく知っていたと考える。それだから、私は貴下のこのミッセージを歓迎し、平和に対する重要な寄与だとみなすのである。ウ・タント事務総長代行の顕著な努力がわれわれ二人の仕事を容易にすること大であった。私は一〇月二七日の私の書簡と、今日(一〇月二八日)の貴下の返簡とが、直ちに実行すべき両国政府間の堅い約束だとみなす。必要な措置は貴下のメッセージがいうごとく、直ちに国連を経由してとられ、その結果アメリカも現在実行中の隔離措置を撤去しうるに至ることを希望する」と伝えた。

九 紛争の解決と大統領声明

一九六二年一月二〇日ケネディ大統領は記者会見で「アメリカが攻撃的兵器としてキューバからの撤去をソ連に要求した核弾頭とこれを運搬するミサイルとの外に、爆撃機があつたが、これも撤去に応じたのでソ連の関する限り事件は解決した。しかしキューバの現地で撤去の実否を査察することは、カストロが同意しないため、アメリカとしてもキューバ不侵入に関する公約の履行は留保せざるをえなかつた。本日私はフルシチョフ議長から現在キューバにあるイリユーション二八型爆撃機全部を三〇日以内に撤去するとの報告をうけた。同議長はまたこれらの飛行機の撤去を観察し、数をかぞえることにも同意した。これは四週間以前西半球が直面した危険の減少に大いに役立つので、私は本日午後『海上隔離』の解除を国防長官に指令した」と前提し、「私とフルシチョフ議長との間に交換された、一〇月二七日と二八日の書簡に示された『了解』が、今日まで履行された進展状況を回顧したい」と次のごとく声明をした。

「フルシチョフ議長はキューバから攻撃用に可能なすべての兵器体系を撤去すること、今後かかる兵器をキューバに導

入しないこと、これら公約の実行と継続を確保するため、適当な国連の観察と監視とを許すことに同意された。他方アメリカは検証に関する適当な取極が樹立されるれば、海上隔離を解除し、キューバへは侵入しないとの保証を与えることに同意した。

「現在までの証拠が示すところによると、判明されたすべての攻撃的ミサイル基地は解体されている。ミサイルとの関連装備はソ連の船舶に積込まれた。出港するこれらの船舶を海上でアメリカ側が査察したところによると、ソ連がキューバに持込んだと報告してきたミサイルの数と、アメリカ自身の情報とがびったり一致するが、そのミサイルが今や撤去されたことを確認している。その上ソ連政府はすべての核兵器はキューバから撤去され、いかなる攻撃的兵器もキューバに再導入しないと声明した。

「しかるに一〇月二七日と二八日との『了解』の重要部分がいまだ実行されないままになっている。それはキューバ政府がいまだ国連に、すべての攻撃的兵器が撤去されたか否かを検証することを許していないことと、将来再び攻撃的兵器をキューバに導入しない恒久的保障がいまだ樹立されていないことである。その結果もし西半球が攻撃的兵器からの防衛をつづけんとすれば、アメリカ政府はキューバにおける軍事活動をチェックするため、アメリカ自身の手段を追求する以外に選択の余地はない。なおアメリカが引続き警戒を行う重要性が、キューバにおけるソ連の地上戦闘部隊の数に関し、最近アメリカが確認したことによって強調された。しかしこれらのソ連部隊は攻撃的兵器体系の保護に関連するものとソ連から報告をうけているので、やがて撤去されるものである。

「アメリカはキューバにおける査察と検証との事業に関する適当な『国際的取極』以上によいものを望まないで、かかる取極を達成する努力をつづける用意があるが、そんな取極が成立するまでは、困難な問題は残るのである。ア

アメリカとしてはもしすべての攻撃的兵器がキューバから撤去され、それが適当な検証と保障との下に、将来西半球から締め出されるならば、もしまたキューバが侵略的共産主義の『輸出』に利用されなければ、カリブ地域には平和がある。アメリカは去る九月私が言明したごとく、西半球において侵略を始めもしないが、許しもしてならない。

「アメリカはキューバからの『破壊活動』を阻止するため、西半球の政治的、経済的その他の努力を放棄もしなければ、いつの日かキューバ人民が真に自由にならねばならないとの目的と希望を放棄もしないが、これらの政策はキューバに軍事的侵入を行う意図とは極めて異っている。

「西半球の一致、同盟諸国の支持、アメリカ人民の冷静な決意、これらの資質はこれからの一〇年間更に幾度か試練されるであろうが、これらの資質こそ将来自由の大義に奉仕をつづけると信ずべき理由をもっている」と結んでい

参考文献

- 一 The Cuban Crisis of 1962, Selected Documents and Chronology, by David I. Larson, 1969, Boston.
- 二 Kennedy, by Theodore C. Sorensen, 1965, New York.
- 三 13 Days, The Cuban Missile Crisis, by Robert F. Kennedy, 1969, London.
- 四 A Thousand Days, by Arthur M. Schlesinger, Jr., 1965, Boston.
- 五 Khrushchev Remembers, Translated and Edited by Strobe Talbott, 1971, U. S.
- 六 The Great Deception, by James Monahan and Kenneth C. Gilmore, New York.
- 七 Public Papers of Presidents, John F. Kennedy, 1961, 1962.